

弁内侍日記における文の断続に関する一考察

——これこそとをりにみえし花山院の大納言さだまさは——

勝 田 耕 起

【1】本稿は、鎌倉時代の女房日記である『弁内侍日記』の、ただ

一か所の切れ続きについて検討する小レポートである。問題の箇所は左の傍線部分で、宝治元（1247）年の上皇主催の和歌会の記事（通例58段とされる¹⁾）である。

八月十五夜、常磐井殿にて院の御会侍りしに、大宮大納言、万里小路大納言、藤大納言為家、権大納言さねを、ゑもんのかみみちなり、吉田の中納言為経、ためうぢ、ためのりなど、さらぬ殿上人も侍りしかども、これこそとをりにみえし花山院の大納言さだまさは、すこしさがりて、歌講せられしほどにぞ参られたりし。

弁内侍日記には次のような注釈本がある。これらそれぞれの底本²⁾において当該箇所を確認したところ、固有名詞の漢字書き・かな書きの違いはあるものの、この箇所に関しては本文に異同は無

かった。

① 玉井幸助、『弁内侍日記新注』（大修館書店、初版1958年、増訂版1966年）※底本Ⅱ群書類従本

② 今関敏子編『校注 弁内侍日記』（和泉書院、1989年）

※底本Ⅱ彰考館蔵本

③ 岩佐美代子校注・訳「弁内侍日記」『中世日記紀行集（新編日本古典文学全集48）』（小学館、1994年）※底本Ⅱ内閣文庫蔵「弁内侍寛元記」

【2】これら①②③の活字本文と「これこそとをりにみえし」に付せられた注記や現代語訳について比較してみよう。

（ア）さらぬ殿上人も侍りしかども、これこそとをりにみえし花山院の大納言定雅は、すこしさがりて、歌講せられしほど

にぞ参られたりし。(①)

●「注記」これこそをりにみえし―未勘

(イ) さらぬ殿上人も侍しかども、これこそをりに見えし。花
山院の大納言さだまさは、すこしさがりて、歌講ぜられし
ほどにぞまいられたりし。(②)

●「注記」この人達だけが通路を通して見えた。

(ウ) さらぬ殿上人も侍りしかども、これこそ通りに見えし。花
山院大納言定雅は、少し下がりて、歌講ぜられし程にぞ参
られたりし。(③)

●「注記」これらの人々が目の届く範囲に見えた、の意。

●「現代語訳」まずこんな人々が私どもの方からは一目で
見えた。

①は「未勘」とし、初版から8年後の増補訂正版でも解釈を保留
している。②は「とをり」を「通り(通路)」と解したものとかわ
れるが、「通路を」通して」とも言っているので、原文をどう捉
えているのか判断としない。そして「見えし。」と文を切った。③
は先行する②の文終止の位置を踏襲しつつも、「とをり(に)」を
「素通し(障害物なく)」の意と解釈している。

しかしながら、右の(イ)(ウ)のような文章理解には、次の三
つの語法上の問題点が存すると考えられる。

(1) 係助詞「こそ」の結びが「見えし。」と連体形で終止し
ていること

(2) 「通り」という単語の意味と用法

(3) 接続助詞「ども」との内容上のつながり

【3】まずは(1)について文法史的なことを確認しておこう。一
般的には平安時代末期から係り結びの弛緩が指摘されているが、
ゾやナムの結びが乱れるのに比べて、コソは已然形で結ぶという
ルールが根強く残ったものである。この作品の中でのコソを含む
文の末尾の形態はどのようになっているか。彰考館本における58
段以外の用例(和歌を除く50例)を整理すると次頁の表のようにな
る。分類の用語、類例は小田勝『実例詳解古典文法総覧』(和泉
書院、2015年、438～447頁)を参考にした。

弁内侍日記における係助詞コソの結びは、半数以上が已然形で
ある。そして已然形で結ばない場合(特殊構文)でも、(A)や(B)
や(C)は平安時代から少なからぬ用例があり、珍しい現象では
ない。(D)は院政時代から現れる句型で、大鏡の例などがある(小
田2015:445頁)。

問題は(E)(F)の不整合の例で、(E)の用例「01」は結び
の形に諸本で異なる。

欠字等で判別不能	特殊構文					已然形結び	例数	所在段(括弧内の数字は同一話内の用例数)
	(F)	(E) 係り結びの不整合①終止形結び ②連体形結び★	(D) 結びの末尾に終助詞(コソくや)	(C) 係り結びの不成立 ⁽⁴⁾	(B) 結びの省略(会話文言いさし)			
5	1	1	1	1	14	1	26	
140 158 161 (2) 175	102	138	112	85	111 18 121 24 140 45 (2) 51 164	54	101 64 78 18 114 68 85 (2) 117 121 141 161	7 8 18 19 36 37 42 50 52 57 63

「01」 三日がほどは様々の御遊びどもあり、など聞こえしこそ、いにしへ、九条右大臣の疊たぐやく六うち給ひたりけんこと思ひ出でられて、今更ゆゆし。(138段)

コソを含む文を形容詞の終止形で結んだ例は枕草子にあり(37段「葦は、いと赤くきらきらしく見えたるこそ、あやしけれどをかし。)、上代にも遡りうる(催馬楽・大芹「小芹こそ茹でても旨し」⁽⁵⁾)ので、少ないながら形としては存したものと見えよう。

ところが、(F)★は過去の助動詞の連体形で結ぶもので、こ

らには諸本で異同がある。

「02」 四条大納言、女房たち誘ひて、御帳の後ろよりはつかに覗きて侍りしこそ、いとおもしろかりし。閑院大納言たちはさらなり。いと興ありて侍りしに、内大臣殿、いかにはやし奉れどもうるはしくも立ち給はざりしに、(102段・彰考館本)

「03」 はつかに覗きて侍りしこそ、いとおもしろかりしか。閑院大納言たちはさらなり。(102段・群書類従本・内閣文庫寛元記本・伴直方書写本、松平文庫本ほか)

問題の58段の箇所を文献②③のように「これこそ通りに見えし。」と読もうとする場合、彰考館本の連体形止め例「02」は一つの根拠になりそうだが、右の全50例に見たように弁内侍日記の係り結びには総じて「違例」といふべきものが無く、寛元記本を始めとする複数の伝本で「おもしろかりしか」としている点を考慮すると、彰考館本102段は「か」の脱字と考えるべきだろう。また、「見えし」は(動詞+し)だが、「おもしろかりし」は(形容詞+力活用+し)であるから、この形が前述(こそくゆゆし)のような形容詞終止形結びと紛れて、「し」で終わる誤写(脱字)を惹き起こしたということも考えられよう。

以上のように、係り結びとして見た場合、「くこそ…見えし。」

の形は類例も見当たらず、弁内侍日記の内部に存在したとは考えにくいのである。

【4】「通り」という語を（イ）のように「通路」の意味として使った例は同時代の用例【04】があるので、助詞「とをり」に「の用法の問題は残るが、「とをり」については一応ありうる解釈である。

【04】院渡らせおはしますとて、人々は立ち退けど、（中略）心なき人になり果てて立たぬを、少納言殿といふ老尼の、かたはらいたしと思て、とほりに立ちて招き騒ぎしが、おかしけれど、心得ぬ様に見もやらでるたり。

（たまきはる・遺文）

ただし、「軒廊けんろうを通りて」（6段）のような対象の建物や女房たちが見ている場所は、具体的に描くのが普通であり、公達の動向を遠望している状況は次のように表現されている。

【05】月いと面白くて、人々いざなひて聞きにおはせしが、中院三位中将、雅忠の中将など、軒廊けんろうの方に見えしかば、空しくて立ち歸りたりしを、（28段）

【06】帳台ちやうたいの試し、二間よりやをら見やりしかば、摂政殿厚棲・柳、内大臣殿紅梅、大宮大納言松襲、残りの人々はいとも見わかず。（70段）

日記全体を通して描写は具体的である。従って、歌会の会場は宮廷外（常磐井殿トヨノ西園寺実氏邸）ではあるが、見えた場所を描写しているのに「通り」という曖昧な単語を使うことには違和感がある。一方、③の（ウウ一目で見えた）説については、（見える）ということに関してトオルという動作が限定修飾しているものとして、

【07】夜に入りぬれば、御前の松の光にとほりて見ゆるに、御透影すまがひかげのおはしまさねば、あやしと思し召しけるに

（大鏡・四・道隆）

という例があり「前駆の持つている松明の光で牛車の中が透いて見える」という意味だが、（AガB二通りテ見ユ）という形と、（Aガ通りニ見ユ）という形とは全く異なる。後者の類例は見いだせず、（ウウ③）は支持しにくい。

【5】また、「通り」の歴史的仮名遣いがトホリであることも、一応考察の対象となろう。平安中期に八行転呼音によって *to:ho:ri* は *to:mo:ri* と発音されるようになるから、鎌倉時代においてトヨリと発音通りに書かれていても、不思議ではない。例えば同じ58段の「参る」は、彰考館本で「まゐる」ではなく「まいる」と書かれている。一方、「言ふ」「給ふ」「あはれ」などは、いう・たまう・あ

われとは書かれないし、同時代の古辞書訓はトホルである(色葉字類抄、類聚名義抄)。

八行とワ行、ワ行とア行など、テキスト内部の仮名遣いの詳細なデータがあれば、仮名遣いに揺れの無い部分については単語の同定の目安となる可能性がある⁽¹²⁾。と考えて、彰考館本の「とをり(通)」と「をり(折)」の仮名遣いを前掲書②およびその底本(注2に記載)によって調査した。「折り」を調べたのは、当該箇所が「通りに」ではなく「と折に」である可能性を考えているからである(後述【7】)。

結果、動詞「とをる」6例、「とをす」2例で、二拍目を「お」や「ほ」とするものは無かった。一方「折り」は、動詞「折る」、名詞「折り」の他に「折松^{せきまつ}」「折節^{せつせき}」「折句^{せきく}」といった複合語も含めて38例あったが、「おりて」と「をらん」(69段)、「おりをえたる」(122段)と「をりをえて」(165段)などから、「折る」については語句による書き癖のようなものが無いことがわかった⁽¹³⁾。つまり、問題の「とをりに」部分は、このテキストの仮名遣い上、「通りに」にも「と折に」にも解釈可能ということになり、表記はどちらかを積極的に排除する手掛かりにならなかった。

【6】最後に、(3) 接続助詞ドモの働きと指示語の指示内容につ

いて【2】の(イ)説Ⅱ(訳…この人達だけが通路を通して見えた)を検討してみよう。歌会への参加者を列挙するところから58段を考える必要がある。

院の御会侍しに、

大宮大納言、万里小路大納言、藤大納言為家、権大納言さねを、ゑもんのかみみちなり、吉田の中納言為経、ためうち、ためのりなど(はべりき)省略?)。

(従風節) ← (主節)
さらぬ殿上人も侍しかども、これこそをりに見えし。

花山院の大納言さだまさは、すこしさがりて、うた講ぜられしほどにぞまいられたりし。(②)

「これこそ」の「これ」は大宮大納言からためのりまでの、顔を見て名前が分かる人々のことを指し、「殿上人は他にもいたけれど、この人たちだけが、通路に見えた。定雅は少し遅れて参上した」という意味になる。この8人ほどだけが通路に見えたということにどれほどの情報価値があるのか。そして、次の文の定雅が遅れて来たという内容とはどう繋がるのか、甚だ疑問である。

さらには、このような形で見えた対象を限定するときには、一

般的に副助詞「のみ」や「ばかり」が使われるものと考えられ、コソが持つ（対象を排他的に選択・強調する）性質とはこういうものではないように思われる。実際、弁内侍日記には次のような例がある。

〔08〕石灰の間に、^{かへりだ}選立ちつくづくと待ちて居たりし、冷えざ

まもいと堪へがたし。（中略）撰政殿、公卿には花山院宰相中将ばかりぞ見えし。（27段）

〔09〕（帝の鶏は）飼ひ立てられしいみじさばかりにてこそ侍れ、

御鳥柄はあやしげなれば（85段）

〔10〕「阿弥陀仏連歌、ただ三人せん」と仰せ言あり。（117段）

〔11〕雲居まで匂ひ来ぬれば梅の花垣根がくれも名のみなりけ

り（79段）

（イ）説のような状況を表すには一般的に「ばかり」が使われ、かつ係り結びとも共起しているため、コソの係り結びが単独で「ばかり」の意味（限定）を表すとは考えにくいのである。

〔7〕以上見てきたように、「これこそ通りに見えし。」と解する従来説は語法上も、また文脈上も不自然と言わざるを得ない。そこで本稿が提案するのが、「みえし」で文を切らずに、連体形を普通の連体修飾語として解する見方である。すなわち、漢字を宛てて

括弧と句読点を付け、複文の構造を示せば次のようになる。

（従属節1）
院の御会侍りに、

大宮大納言、万里小路大納言、藤大納言為家、権大納言さねを、

糸もんのかみみちなり、吉田の中納言為経、ためうち、ためのり

など、さらぬ殿上人も侍りしかども、
（従属節2）

「これこそ」と折に見えし花山院大納言さだまさは、
（主節・主部）

（主節・述部）
すこしさがりて、歌講せられしほどにぞ参られたりし。（私案）

「とをりに」は「通りに」ではなく、「と・折に」という単語の構成とし、「殿上人はたくさんいたけれども、『この人は』といつも時節になくなって見えたあの花山院の大納言は、この日は遅れて来た」と接続助詞ドモによって対比的に解するものと考えた。定雅の不在・遅刻は、〔6〕で解釈したような補足的情報ではなく、この日の歌会の様子で最初に描かれた中心的出来事だったのである。無論、この見方を成立させるためには、次の三つの点に関する実証が必要である。

（a）口語としての「これこそ」

(b) 「折に」の用法

(c) 日記の書き手が花山院の大納言定雅に注目していたということ

【8】同時代に「これこそ。」と言いきした例には次のようなものがあり、特に女性の言い方として自然なものであったと言える。

【12】をさなき人のおはしけるを、少将「あれはいかに」と宣へば、六条「これこそ」とばかり申して袖を顔に押し当てて涙を流しけるに(平家物語・三・少将都帰)

【13】昔より何事もうち絶えて、人目にも「こはいかに」などおぼゆる御もてなしもなく、「これこそ」など言ふべき思ひ出では侍らざりしかども、(とは)すがたり・四)

【14】(入道方)「御舍利や持ち給へる。渡し給ひてんや」と云へば、(中略・巫女八)「これこそ」とて渡し奉る。また感涙抑へ難かりけり。

(米沢本沙石集・二・仏舍利を感得したる人の事)

また、【3】の表中Bに示したように「こそ」で終わる会話文が14例あり、弁内侍日記で使われる言い方であったことが知れる。

【9】次に(b)について、連体修飾を受けない「折(に)」の例

を確認する。弁内侍日記には合計7例存する。

【15】権大納言、昼番なり。「前の番勤めざりしに、代りに今宵は夜もすがら候はん」などのたまひて(中略)「思はぬ方にたなびきにけり」といふ歌を詠めて過ぎ給ひし、「折から面白し」など人々聞こえしを、(145段、新編全集訳「情景に合つて面白いこと」)

【16】色々の紅葉も、折を得たる心地す。(122段)

【17】物具にて参るべきよし仰せありしかば、折しも押し出しの衣、用意なきよし申して、萎えたらんも又いかかとて、弁内侍「しほれたる衣な着せそ大海の海女の袖かと人もこそ見れ」(16段)

【18】花も盛りに面白きに霧立ちわたたりて、折しも雁の鳴き渡り侍りしかば、(62段)

いずれも慣用的表現であるが、衣装の用意がなく人に見られたら困る、と言っている用例「17」は「折悪しく」という意味である。単独の「折」の良し悪しは、文脈に依存している。

「折に」の形は弁内侍日記には無いが、同時代の説話に次のような類例というべきものがある。

【19】先の歌は貫之が歌、後の歌は満誓が歌なり。をりにふる歌を詠じたるにこそ。

(米沢本沙石集・五・十三 学生の歌好みたる事)

[20] (遭難して島に流れ着いた兄妹は) 木切りて庵など作りける。生り物の木の、をりに生りたる多かりければ、それを取り食ひて明かし暮らすほどに、秋にもなりにけり

(宇治拾遺物語・四・四)

用例「19」は恵心僧都の弟子の児が「月」や「船」を見て優れた歌を詠んだというエピソードの後の文で、状況は用例「15」と似ている。その他古本系の梵舞本でも「ヨリニ古歌ヲ詠ジケルニコソ」で副詞「ヨリニ」が認められる。新編全集では「その時節、景物に適った古歌を詠んだのだろう」と訳すが、先に確認した「折」の単独用法を踏まえ、逐語的に連用修飾で訳せば「そのちようどいい折に」となる。用例「20」は、苗を船に積んで遭難してから数か月、木の実を食料としたということだから、「をり」は具体的には晩春から秋にかけてのそれぞれの季節である。そのような、共有されているけれども「かかる」のような連体修飾語によつては限定しにくい、さまざまな時節・タイミングを単に「をり(に)」と表現したものと考えられるのである。

[10] 花山院の大納言定雅は、この58段以前に2回描かれている。

[21] 大宮の大納言琵琶、花山院の大納言笛、兵衛督拍子、

おもしろしともいへばなかなかなり。(24段・清暑堂の御神楽)

[22] 行香に立つ人々、左大臣殿鷹司殿、花山院の大納言さだまさ、権大納言さねをなどぞ御あかしの光にほのみしりたりし、さならぬ人々はいと見わかず(48段・最勝譚)

このように、定雅は主要な役割をもつ殿上人として、「さならぬ殿上人」「さならぬ人々」とは区別されて認識されてきているのである。⁽¹⁶⁾ 58段以降でも、次のように再三登場し、

[23] ためうちの中將奉行にて御鞞あり。花山院の大納言、冷泉の大納言、万里小路大納言、左衛門督、右衛門督、すけひら、きんただ、ためうち、ためのり、たかゆき(87段)

[24] 三月二十八日、改元なり。公卿八人。上卿花山院の大納言さだまさ、経光の宰相などぞきこえし。(88段)

[25] 十六日除目なり。冷泉の大納言、右大將、花山院の大納言、左大將になり給ふ。とりどりにゆゆしき大將たち、いとめでたし。(127段)

[26] 左大將さだまさ、右大將きんすけ、立ち並びて、ことに給ひし見目ことがためしなく(中略)人々いづれか猶まさと仰せられあひ(138段)

[27] 昔の花山院の御絵(中略)侍りしに、左大將朝光、右大

将成時（中略）を人々見給ひて「ゆゆしかりける

並びて事に従ひけん、いかに、い

「今の大將さだまさ・きんすけ、な

「咲きならぶ昔の花の色

と評価が高い。58段を除いて、定雅については宮中の行事に立派に参加している姿だけが描かれている。この日記が最終的にいつまとめられたのかは明らかでないが、三次に渡る生成過程があったことが、登場人物の官職等の齟齬から明らかになっている（阿部1998Ⅱ注11）。日次の記ではないから、定雅が活躍し取り立てられていく姿を見届けた上で、回想しつつ「これこそ、と折に見えし」と58段に記すことも可能だったろう。

〔11〕ではなぜ、定雅がこのように扱われたのか。

阿部真弓（1995年）¹⁸は、弁内侍日記の構成について次のように指摘する。

全体を通じて、明るい話題が収録されており、暗い内容を持つ

つ章段は、現存する一七五章段のうち、十四例にすぎない。

ここで注意が喚起されるのは、そのうち十例が、宝治元年に、

それも三十段たらずの間に集中していることである。

とし、35段から52段を内容によってA〜E群に分けると、A（こ

の世の無常）↓B（宮廷賛美）↓C（この世の光と影）↓D（宮

廷賛美）↓E（この世の無常）というふうには、「宮廷をめぐる明暗

が対比的に展開されていく」という。そして本稿で問題にしてい

る58段は、「宮廷をめぐる禍福というテーマを有する点で（絶頂

期を迎えた西園寺家と、その陰で痛恨の日々を送る人々とが、一

章段内に描かれている」C群と）同一線上に位置すると考えられ

る」と位置づけている。

定雅は、失墜した九条家ではないし、政権を握った西園寺家でもないが、西園寺家の象徴である公相（Ⅱ用例「21」の大宮大納言Ⅱ「23」の冷泉大納言、作中最多の28回登場）と、最後には大将として並び称される。つまり、公相の栄華を描くためのライバルだったのであり、ライバルが優秀であればあるほど、公相が光るのである。

58段は定雅に関しては唯一の不手際の話であり、さらにミクロにみれば、当該箇所「これこそ、と折に見えし」定雅が「下がりて：参られたりし」という一文の中にも、定雅自身の「明」と「暗」を表現したと考えることができよう。

〔12〕後嵯峨院の歌会は、楽しいはずの恒例行事であった。が、58段は楽しい要素の無かった、寂しい話である。これまでの検討か

ら、全体像は次のように①～④の展開として捉えられる。

八月十五夜、常磐井殿にて院の御会侍りしに、大宮大納言^①、万里小路大納言、藤大納言為家、権大納言さねを、ゑもんのかみみちなり、吉田の中納言為経、ためうち、ためりのりなど、さらぬ殿上人も侍りしかども、「これこそ」と折に見えし花山院の大納言さまは、すこしさがりて、歌講せられしほどにぞ参られたりし。^②月は曇りがちにて、いと口惜し。この暁、御匣殿^③うせさせ給ひぬと聞こえし程なれば、よろづ物あはれなり。御連歌などもありき。^④「また見るかげのなかるらん」といふ古言の、御口すさみに聞こえしもいとあはれにて、弁内侍、

秋の夜の浮雲晴るる月はあれどまた見ぬ影を誰したふらん

せつかく八月十五夜に西園寺実氏邸に集まったのに、公相と並ぶ有力者、花山院の大納言定雅は来ない(①)、月は曇りがち(②)、そして主催者である院の后がその日の朝に亡くなっており(③)、後嵯峨院も寂しそうで気の毒である(④)。定雅の不在(遅刻)はこういう流れの最初に位置付けられた残念な出来事だったと考えられる。

「これこそをりに見えし」という言葉は定雅についての描写で

あり、日記全体の展開とも関係する高密度の表現ととらえることが適当であることを、先行する作品論を援用しつつ、主に語法面の検討を通して述べた。

注(1) 以下、弁内侍日記における用例の所在は、便宜的に玉井幸助『弁内侍日記新注』(注釈本①)の一七五章段の切り方に拠り、その数字で示す。

(2) ①は国立公文書館デジタルアーカイブ(請求番号261-00001、30頁)、②は『彰考館蔵弁内侍日記』(岩佐美代子編、和泉書院影印叢刊50、1986年)61頁、③は国立公文書館デジタルアーカイブ(請求番号203-0112、36頁)による。

(3) 『日本語文法大辞典』(明治書院、2001年)「こそ」には「院政・鎌倉期以降、「こそ」の結びが終止形・連体形となる破格は、次第に目立つようになる。その破格も初期には「けり」、伝聞「なり」、△系の助動詞「む」「らむ」「けむ」に多いことが報告されている。〈中略〉やがて破格の範囲はその他の助動詞、用言一般に広がった」(野村剛史執筆)とある。

(4) 例は『いみじからんところ思ひし』など、返返ころうくて」85段。

(5) 鍋島家本「己世利己曾 由天々毛牟末之」

(6) 前掲(①の) デジタルアーカイブ下巻4頁

(7) 前掲(③の) デジタルアーカイブ69頁

(8) 国立公文書館デジタルアーカイブ203-0110下巻3頁

(9) 坂口博規「松平文庫本「後深草院弁内侍歌集」翻刻」(『岩見沢駒沢短期大学論集』1、1988年)によった。その他、伏見

家本（新日本古典籍総合データベース〈伏―267〉74頁）、筑波大学蔵本（電子資料〈ル170―58〉68頁）も同じ。

(10) 山口雄輔「係り結びよりみた『弁内侍日記』と『中務内侍日記』の文体」（『立正女子大学紀要』6集、1972年）では注釈書

①をテキストとし、『弁内侍日記』散文部分のコソは55例、うち結びの省略は15例、流れは5例とする。【こ】に記したように、注釈書①は58段の当該部分の解釈をしていないが、これを山口がどこに分類したかは不明。

(11) 注釈書①②③は善本とするが、阿部真弓『弁内侍日記』の総合的研究（博士論文、大阪大学、1998年）では「内閣文庫蔵本『弁内侍寛元記』は欠落の多い、劣悪な本を祖本としている」（44頁）と指摘している。阿部は2014年刊行の『日本語大事典』「弁内侍日記」項目においては「現存本では彰考館本が比較的善本とされる」とする。

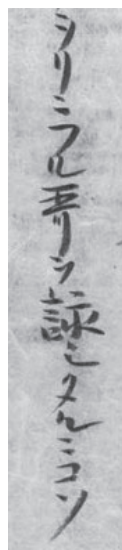
(12) 例えは文脈上あきらかに「通る」を表す部分が例外なく「とほろ」と表記されている場合、「とをる」と表記された部分は別語と判断するということ。

(13) 「おり」「を」「お」と訂するもの15例、「をり」2例。参考までに、玉井（注釈①305頁）が「最も初生の形を示す」とし、岩佐（注釈③144頁）が「彰考館本と並ぶ最善本」とした「弁内侍寛元記本」も前掲デジタルアーカイブで調べたところ、動詞「とをる」5例、「とをす」1例で、二拍目を「お」「や」「ほ」とするもの無し。「折り」「折る」とその複合語は37例、「おり」18例、「をり」17例、漢字表記「折」2例であった。

(14) 市立米沢図書館デジタルライブラリー（請求記号…米沢善本152、5冊目20頁）による。画像のように、原本漢字カタカナ混じりで、

当該箇所は「ヨリニフル哥ヲ」と確認できる。「ル」の下に踊り字は無く、「折に触るる歌」という解釈は無い。

【画像】米沢本沙石集



(15) 流布本は「二（つ）ながら古歌を」とする。

(16) 37段では、行事の参加者の具体的な名前を3人列挙した後「残りの人々は聞きしかども忘れにけり」とわざわざ記しており、意図的な待遇差であることが考えられる。

(17) □は本文の欠字部分を表す。

(18) 「『弁内侍日記』の描く栄枯と無常感―宝治元年章段の構想をめぐって―」『待兼山論叢』文学篇29号

（本学教授）